

事後評価報告書

カフラマンマラシュ(トルコ南東部)地震関連「国際緊急共同研究・調査支援プログラム(J-RAPID)」

1. 研究課題名: 「カフラマンマラシュ地震の学校・子どもへの影響および防災教育状況の調査」

2. 研究代表者名:

日本側: 東北大学 災害科学国際研究所 准教授 福島 洋

トルコ側: トルコ教育協会大学 心理学科 助教 ジャナイ・ドウル

3. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

周到に準備されたオンラインアンケート、被災した学校教員も参加した現地でのワークショップ、さらに教育行政当局への聞き取りを、地震後1年余りの期間に精力的に実施して、重要なデータや現場の生の声を収集し、現地の研究者と教員、教育組織と共有出来たことで大きな成果をあげ、防災教育の向上に大きく貢献するものといえる。特に、第一次フィールド調査に基づいて、被災体験がトラウマとなって心のケアを必要としている教員や児童への配慮を優先した判断は、調査の組み立てを被災地の実情に応じて慎重に行うことの必要性を示し、現地調査で必要な被災者への配慮を改めて強調している。オンラインアンケートの内容は、調査の目的に対応した適切なものであり、回答数も十分な数である。その回答結果を議論の素材の一つとして開催されたワークショップのプログラム、運営状況が具体的に報告されており、多くの貴重な知見や結論が導き出されたことがわかる。周到な準備と、被災した教育現場に対する慎重な配慮をもって、取得されたデータと導き出された防災教育への視点は高く評価することができる。

一方、トルコにおける学校防災(災害)教育の実施状況も踏まえて、「我が事化」「行動変容」に着目した防災教育パッケージの開発への展開、実際の防災教育研修での試行なども行いながら完成度を高めるといった点への将来展望が明確となっていない点が残念である。

(2)交流活動の評価について

トルコと日本の研究者や実務者の相互理解や信頼関係が構築され、共同研究を継続・発展させることができている点は、交流活動として大きな意義を持っている。また、現地からデータを引き出すだけでなく、日本側研究者の経験や過去の成果を現地での教育復興に役立てることができた点も評価できる。

一方、交流の礎が構築されたことは評価できるが、今後の持続的な連携の姿が明確になっていない点、本調査により収集・整理される記録は、強震による被害リスクの存在する世界各地(日本、米国、チリ、メキシコ、インドネシア、フィリピン、インド等)の防災啓発・教育において貴重な教訓事例として長

きに渡り使用することの展望が示されていない点が残念である。

以上